

ウィリアム・ハミルトン

1 ヤローの川土手

男： さあさあ支度を 愛しいとの新妻  
さあさあ支度を 可愛い花嫁  
さあさあ支度を 愛しいとの新妻  
ヤローの川土手 忘れることだ

質問者： 愛しいとの新妻 どこで手に入れたのです 5  
可愛い花嫁 どこで手に入れたのです

男： それは おれが二度と姿を見せないところ  
ヤローの川土手 樺かばの木を抜いた場所

泣くのは止よしな 愛しいとの新妻  
泣くのは止よしな 可愛い花嫁 10  
出てゆくからって 悲しむな  
ヤローの川土手 樺かばの木を抜いた場所

質問者： 愛しいとの新妻 なぜ泣くのです  
可愛い花嫁 なぜ泣くのです  
あなたは どうして 二度と姿を見せないのです 15  
ヤローの川土手 樺かばの木を抜いた場所

男： 泣きやめないのも無理はない  
いつまでも悲しむのも無理はない  
おれが二度と姿を見せないのも無理はない  
ヤローの川土手 樺かばの木を抜いた場所 20

女は 愛する男を亡くしたのさ  
愛する男を亡くして 泣いてるのさ  
おれが その優やさおとこ男やを殺ったのさ  
ヤローの川土手 樺かばの木を抜いた奴

質問者： ヤロー川よ どうして水が赤いのです 25  
どうして 川土手に悲しい声が聞こえるのです

どうして 服が悲し気に  
ヤローの川土手 榿かばの木に掛かっているのです

悲し気な川面かわもに何が浮かんでいるのです  
向こうに何が浮かんでいるのです ああ 悲し気な川 30  
男： あれは おれが殺した優男やさおとこ  
ヤローの川土手 女を泣かせた場所

傷口を涙で洗ってやるがいい  
傷口を悲しみの涙で ぬぐってやるがいい  
亡骸きょうかたをびらにくる包んで 35  
ヤローの川土手 寝かせてやるがいい

涙に暮れる姉妹たちよおんな  
奴の墓を建ててやるがいい  
墓を囲んで泣いてやるがいい  
ヤローの川土手 倒れた不運を 40

役立たずの盾よ 呪うがいい  
命を奪ったおれの腕を呪うがいい  
胸貫いて お陀仏させたおれの槍を呪うがいい  
ヤローの川土手 優男やさおとこの胸元ぶち抜いたおれの槍

女ほに惚れるなど 何度も忠告したはず 45  
おれとの決闘から手を引けと 忠告したはず  
ああ おまえは向こう見ず  
ヤローの川土手 闘う相手が強過ぎた

榿かばの木 芳かんばしく 草青々と  
黄色い雛菊一面に咲き 50  
岩から突き出た木にはリンゴもたわわに  
ヤローの川水 美しく流れゆく

美しいだと ツイード川も負けてはいない  
草も青々 雛菊も黄色く咲いて  
川土手かばの榿かんばの木も芳しく 55  
岩から突き出た木にはリンゴもたわわ

奴は確かに<sup>やさおとこ</sup>優男  
女の花帯<sup>から</sup>に絡めとられた恋の虜  
なるほど奴は<sup>やさおとこ</sup>優男 惚れた仲かも知れないが  
このおれほど お前を愛するものはないのだ 60

さあさあ支度を <sup>いと</sup>愛しの新妻  
さあさあ支度を 可愛い花嫁  
これからは ツイードの川土手でおれを愛し  
ヤローの川土手 忘れてしまえ

女： どうしてわたしが 新妻の支度など出来ましょう 65  
どうして 可愛い花嫁の支度など出来ましょう  
どうしてツイードの川土手で あの男を愛せましょう  
ヤローの川土手 わたしの愛する人を殺した男

ああ ヤローの野辺よ 決して雨にならないで  
可憐な野花が雨の<sup>しずく</sup>滴で濡れませんかように 70  
そこには 愛する人が惨めな姿で  
変わり果てた姿で 横たわっているのです

あの方は わたしが縫った緑の上着と  
深紅の<sup>ベスト</sup>胴着で出かけていった  
ああ その時は思いもしなかった 75  
あの方が わたしの手縫いの服着て死ぬことになるなんて

あの方は 白い馬で出かけたの  
こんなことになるなんて思いもかけず  
そして 日暮れ前には  
ヤローの川土手 死体となって横たわったの 80

その悲しい出来事の日 何も知らずにはしゃいでた  
わたしの陽気な歌声が森にこだまして  
でも日暮れ前には 恋人の命を奪う槍が飛んで  
わたしを地獄の悲しみに突き落としたの

<sup>むご</sup> <sup>むご</sup>  
酷い酷いお父さんは 85

どうして そんなに怒ってわたしを追うの  
恋人の血が <sup>あなた</sup> 新郎の槍に付いてるわ  
野蛮な新郎が <sup>あなた</sup> どうしてわたしに求愛なんかを

幸せなお姉さんたちは

わたしの不幸をせせら笑って 言うでしょう 90  
ヤローの川土手に出かけて行って  
<sup>ひっぎ</sup> 棺の中の恋人に逢ってらっしゃい と

お兄さんのダグラスは

わたしを咎め脅して 追い出そうとするでしょう  
恋人の血が <sup>あなた</sup> 新郎の槍に付いてるわ 95  
どうして そんなあなたを愛せなんて言えるの

さあさあ 愛の寢床を用意して

<sup>にいどこ</sup> 新床のシーツで <sup>からだ くる</sup> わたしの 躰を包んで  
<sup>おまえ</sup> 侍女たち 戸を開けて  
わたしの夫になる方を 中にお入れして 100

でも 夫になる方って誰のこと

その人の手には血糊がべったり  
ああ 向こうからやって来る亡霊は誰  
<sup>きょうかたびら</sup> 白い経帷子に身を包み <sup>くる</sup> 血をしたたらせて

顔は真っ青 さあ その人を横たえて 105

冷たい頭をわたしの枕に  
花嫁衣装を脱がせておくれ  
悲しみでいっぱいわたしの頭に柳の冠を

顔真っ青なあなた 死ぬほど好きよ

わたしの<sup>ぬくもり</sup>体温で 蘇らせてあげる 110  
ひと晩中 この胸に顔を埋めておやすみなさい  
あなたが初めてよ 温かいでしょ

本当に顔は真っ青 ああ 愛するあなた

あんな卑怯な人殺し でも もう赦しておあげ  
ひと晩中 この胸に顔を<sup>うず</sup>埋めておやすみなさい 115

あなただけよ　ここで眠らせてあげるのは

男： さあさあ　涙に暮れる花嫁よ  
戻って来るんだ　詮<sup>せん</sup>無い涙はとつと乾かせ  
おまえの恋人には　悲しい溜息など聞こえはしない  
ヤローの川土手　奴はとっくにお陀仏よ

120

(山中光義訳)